

野口武彦「幕末気分」(2002年)

# アナタ上野デ負ケマシタガ弱クアリマセン。



日本海から吹き付ける強風をかめ島が遮る江差の港。遠くの山々はうっすらと雲に覆われ始め、1990年に復元された開陽丸が朝日に輝く(北海道江差町で)

名言巡礼

## 徳川武士へ再起の激励

1868年7月、上野戦争で彰義隊は壊滅、敗残兵は品川沖の榎本武揚艦隊に合流した。旗艦「開陽丸」で彼らを激励したのは、フランス士官シユール・プリユネのカタコトの、しかし力強い日本語だった。  
 ▲アナタ上野デ負ケマシタガ弱ク

アリマセン。コレカラ私ト蝦夷キマス。榎ノ根タベマス。命ヲ根ノトシ、信念のためには死を避ることもいとわぬという「史記」首陽山の故事。言葉は続く。▲開陽タクサン能キ船アリマス。負ケマセン。▼

開陽丸(排水量2500トン)はオランダで建造された新鋭艦だった。1690年、ツツ砲18門などを備え、幕府軍逆転の希望を抱いていた。

作家の野口武彦さん(79)は「必要だったのは兵を感奮させ、新たな目標を与える言葉でした。彼は見事にその責務を果たした」と冷静に見る。兵たちは彼にサムライを感じ、俄、気あふれる言葉に、心を震わせた。

プリユネはこの前年、幕府が招いた軍事顧問団の副団長として来日。29歳のエリート軍人は幕府軍の洋式化に尽力したが、イギリスに支援された百軍の優勢は揺るがず、顧問団には帰国命令が下る。だが彼は自分を頼る教え子の将兵を見捨てなかった。辞表を提出し、日本人に対する信頼を守るため、攘土重来を期して北へ走る反政府軍に身を投じた。

榎本軍は一時、北海道南部を制圧する。だが1868年12月28日(旧暦11月15日)、開陽丸は江差沖で暴風雪にあおられ座礁。無二の巨艦を失い、箱館戦争の帰趨は決した。官軍は陸海からの反攻を本格化し、五稜郭に屯る榎本らは翌年6月降伏。直前に脱出したプリユネは本国送還に。その後、普仏戦争に参加、陸軍の幹部を務め、波乱の軍歴を閉じた。

▲来年三月帰リマス。其ノ時アナタ上野見マス。楽シミマスカ、酒ノミマスカ、喜ビマスカ。私思ヒマセン。アナタ演出マスアル。開陽艦上、プリユネが言葉を重ねると若き侍たちは涙をこぼした。戦に明け暮れた彼に上野の桜をめでる日々があったらうか。それは彼が心に描いた花だったろう。

文・柴田文隆  
 写真・清水健司

…2面に続く



江差 北海道

※幕末気分

作家の野口武彦さんの読売文学賞(2003年)受賞作(講談社文庫)。選考委員の丸谷才一さんは「歴史を素材にして世界と人間を研究しようとする試み」「ちょっと斜に構えて好事家を気取ることにより、興味津津たる文明評

論の書をものした」と評した。プリユネが激励する場面は「彰義隊戦史」中の寺沢正明「一生一話」からの引用。野口さんは6年前に大病を患ったが、今も右手の中指1本で原稿を打ち続ける。「慶喜のカリスマ」「花の忠臣蔵」などの近作は、驚くほど若々しい。

よみほっと 日曜版

- 3 アート散歩  
— デトロイト美術館展  
皇室ダイアリー  
はな図鑑
- 4 漫画「猫ピッチャー」  
ポケモン  
英語でひとこと
- 5 秋元康の1分後の昔話
- 7 テレビ情報
- 10 小池徹平さん登場



動画は  
 YOLでも

■ 問い合わせは読者センター  
 東京 03-3246-2323  
 大阪 06-6363-7000

■ 読売新聞ご購入は 0120-4343-81

